

トイレ

文藝春秋4月号(2016年)の表紙に、「北朝鮮と中国を侮るな」という言葉が大きく刷り込まれていた。北朝鮮についてはマスコミを通じての知識しかないから、評価のまとめようがないが、“地球を遠足”のチャンスで何回か訪れた中国に関しては、「中国を侮るな」を実感している。

2006年の正月にミニヤコンカ展望のトレッキングを楽しんだのだが、成都で出会った女性のガイドさんの「中国の自信」をうかがわせる意気軒昂さにはショックを受けた。昨年10月、雲南省の茶馬古道を探訪した。ほとんどは専用車で回ったのだが、玉龍雪山では手前の駐車場に専用車を置き、ロープウェイ乗り場までは一般のバス利用となる。列に並び、バスに乗る。すでに座席は埋まっているので前に立つと、座っている若い人がスマートに立ち上がり、「どうぞ」と席を譲ってくれる。小ポタラ宮と称される松贊林寺のときも同様だった。そのことを中国人の知人に話したところ、最近、モラル急上昇中だと笑っていた。

今年の11月、黄山のハイキングを楽しんできた。コースは、我々日本人にはやり過ぎ感を抱くほどきれいに整備されていて、ゴミ一つ落ちていない。トイレがきれいで、数がたくさんある。男性用小便器の上のスペースには、水墨画のような写真が並べて貼られていた。悪臭など無縁である。しかも利用料など取らない。中国のトイレといえば、だれもが“あの仕様”を想像するだろうが、とんでもない。中国人大衆の割り込みや喧噪、バク買いあるいはトイレの仕様を、我々日本人は眉をひそめて話題にする。それはまぎれもなく優越感の裏返しであろう。黄山が特例かもしれないが、中国はまぎれもなく変わりつつある。中国を侮ってはならないのだ。

昔々、登山者の大多数は男性だった。山小屋のトイレは汚かった。いつの頃からかトイレがきれいになった。トイレがきれいになるに従って、女性登山者が増加した。トイレとは、それくらいのものである。北漢山十二城門周遊で降り立ち飛び立った仁川空港で、成田の負けを実感した。トイレの数が多くきれいなのだ。成田のゲートで搭乗時間になり、乗る前にちょっとトイレに寄っておこうと思っても、すぐ近くにないことが多い。仁川ではすぐ近くにあることが多い。北朝鮮についてはコメントできないが、韓国もなかなかやるな、と思った。これだけでなくはハブになれまい。トイレはお金を産み出さないスペースだ。そんなスペースにどれだけスポットライトを当てられるかが、その国の勢いというものであろう。割り込みやバク買いを笑っている場合ではない。

黄山では入山料は取るが、トイレは無料。富士山では善意の人からは入山料を取り、トイレは有料。世界遺産としてはどちらが世界の人に支持されるか、自明であろう。トイレ一つとっても、中国を侮ることはできない。